

「未来に残したい湘南の自然」第3回「遠藤^{ささくぼやと}笹窪谷の自然を知ろう」資料

1. 遠藤笹窪谷の位置・地形

笹窪谷は藤沢の西北部に位置し、その規模は 33ha。単一の谷戸としては、藤沢市内最大規模である。

少年の森、宇都母知(うつもち)神社の林と一体となった緑地を形成し、周辺に農地が広がっている。

小出川の水源の一つ(水質が保たれている水源としては唯一の場所)。

かつてはウシロ谷戸、打越谷戸など、周辺各所に谷戸が見られたが、ウシロ谷戸には慶応大学湘南藤沢キャンパス(SFC)ができ、打越谷戸には打戻方面に向かう舗装道路ができた。

2. 生物多様性の高い遠藤笹窪谷

笹窪谷は、川名清水谷戸と共に最も生物多様性の高い場所の一つである。

3. 笹窪谷を特徴づける生きもの

◆湿地

ヒメシダ、コウヤワラビ、オニスゲ、チダケサシ、ウキヤガラ

◇ハンノキ疎林:ハンノキハムシ

◇ショウブ:ツマキホソハマキモドキ

◇オギ原:カヤネズミ

◇ヨシ原:キンヒバリ



ヒメシダ



オニスゲ

◆細流

ヤマサナエ、オニヤンマ、ミルンヤンマ、シマアメンボ、サワガニ、ホトケドジョウ

◆樹林地

ササクサ、ヒトツバハギ、イワガラミ、ヤマアジサイ、ノブキ

ウスタビガ、エゾカタビロオサムシ、ヤマトタマムシ、マスダクロホシタマムシ、ヨツスジハナカミキリ、ヒメカマキリモドキ、ヤマトガガンボモドキ

◇林床・林縁

トウゲシバ、キツネノカミソリ、ヤブムグラ、リンドウ、アキノキリンソウ



ハンノキハムシ



ツマキホソハマキモドキ



イワガラミ



ノブキ

ウラゴマダラシジミ、クツワムシ(市内最大の生息地)、トゲナナフシ、ニホントビナナフシ、クロマドボタル

◆複数の谷戸環境を利用する生物

・爬虫類

ヤマカガシ、ニホンマムシ、シロマダラ、ヒバカリ

・鳥類

◇留鳥：ヤマガラ、オオタカ、ノスリ、フクロウ、エナガ、ヒバリ、イカル

◇冬鳥：ミソサザイ、ベニマシコ、クロジ

◆哺乳類

ノウサギ、ホンドタヌキ

4. 変化する生態系

1) 絶滅した生きもの・激減した生きもの

ミズニラ、ニホンカワトンボ、シュレーゲルアオガエル(?)

※1995年3月の埋め立てが大きく影響しているものと思われる。

シュレーゲルアオガエル：1995年の埋め立て以降記録が得られていない。

ニホンアカガエル:2005 年以降、記録が得られていない。

ゴイシジミ:近年激減し、2011 年は県内でまったく記録されなかった。2012 年も7月まで記録は得られていない。

2)増える生きもの

◇南方系種の進出・増加

さまざまな南方系の生物が北へ東へと分布を拡大したり、個体数を増加させている。中でも、昆虫類の事例が多い。

1)植物

キジョラン

2)昆虫類

①蝶類

クロコノマチョウ、ツマグロヒョウモン、ナガサキアゲハ、ムラサキツバメ

②蛾類

ナカグロクチバ、クロメンガタスズメ

③直翅類

ヒサゴクサキリ、フタツトゲササキリ、ヒロバネカンタン

④半翅類

ヒメジュウジナガカメムシ、シロヘリクチフトカメムシ

⑤その他の小動物

マルゴミグモ

◇外来種の進出

植物:オオブタクサ、セイタカアワダチソウ、アレリウリ、セリバヒエンソウなど

動物:アオマツムシ、アメリカザリガニ、ヨコヅナサシガメ、ブタクサハムシ、アワダチソウゲンバイ、アカボシゴマダラ、コジュケイ、ガビチョウ、ソウシチョウ、アライグマ、ハクビシン

5. 笹窪谷の保全管理作業

1)湿地再生の効果

- ・絶滅種となっていたミズニラが、2013 年に再発見された。
- ・これまで記録のなかったミズワラビ、コアゼガヤツリ、ヒナガヤツリが、2013 年以降確認されるようになった。
- ・ガマの増加
- ・しばらく記録の途絶えていたシオヤトンボ、ニホンアマガエルが、2014 年以降に確認されている。

6. 笹窪谷、現状の問題点

- ・谷戸底の埋め立てや大型機械による水路の掘削など、自然環境の改変の影響が残る。
- ・過管理などによる生物多様性の低下
機械を使った管理(刈り払い機、チェーンソー、乗車式草刈り機):短時間での環境改変
※良好な乾性草地在ほとんどない。



コアゼガヤツリ



シオヤトンボ♂

・藤沢市に残る“三大谷戸”の一つとして保全の方向性は打ち出されているものの、谷戸内を利用し、多くの人を招き入れたいと考える地域の人もある。

「健康と文化の森」構想が消えているわけではなく、市も保全と利用のバランスを考えている。

・谷戸の生態系に配慮した保全管理の枠組みが出来上がっていない。

なぜ、保全管理作業が必要なのか？

人が手を入れなければ樹林や草地の植生はやがて遷移していき、極相へと向かう。

極相を好む生物もいるが、手をまったく入れなければ環境は単純化し、生物多様性は低下していく。

保全管理に当たって留意すべき事項

※生態系管理の考え方にに基づく保全管理作業の実施

生態学に基づく地域固有の生態系特性に留意した管理

※順応的管理の必要性

◇順応的管理：計画における未来予測は不確実性があることから、計画を継続的なモニタリング評価と検証によって随時見直しと修正を行いながら管理するマネジメント手法。

①笹窪谷を特徴づける生物の生息に配慮した管理を実施し、

ex.オギ・ヨシ原、ススキ原などに依存する昆虫類が少なからずいることから、選択的な管理が必要。刈り込む場合も、地上から 15 cmを残すというような配慮が必要。

②その後の状況をモニタリングし、

③モニタリングの結果で管理方法を適宜修正する。

※谷戸低地の保全のあり方についての理解の浸透

かつて、谷戸底を水田として利用していたからといって、周辺に谷戸環境が残されていない地域では谷戸底全体を水田に戻してしまうと環境が単調化し、生物多様性が低下してしまう。

・「緑化」が生物多様性を低下させる

「みどり」があれば、生物多様性が高いわけではない。

ex.「花いっぱい運動」などで、園芸植物などが植栽される際に、従来の草地環境が失われてしまう。

◆大事なものは、土(表土)と水、これらの上に形成された水辺、草地、樹林地の保全

◆多様な環境を維持・再生させることで、生物多様性を維持・向上させる。